



ノンフォーマル小学校、成人識字学級の目印は緑の看板。授業は一般家庭の一部を借りて行われることが多く、少しでも文字に触れる機会を増やすため、教室には先生手作りのポスター教材が掲示されている

られること約1時間、水牛の群れを横目にあせ道を走っていると、その先の納屋から元気な声が聞こえてきた。中をのぞいてみると、8畳くらいの小さなスペースに20人近くの子どもたちが座っている。冷たい床に薄いカーペット、そして小さな黒板。日本では想像できない簡素な教室。だが、教科書とノートを前に彼らの目は真剣だ。

「週5日、ここで英語、ウルドゥー語、算数など、小学校と同じ勉強をしているんですよ」

そう話すのは、ラハナ・ナズ生（23歳）。自宅の一部を提供して、近所の子どもたちに勉強を教えている。ここは、公立・私立の学校に通えない子どもたちが学ぶ「ノンフォーマル小学校」。教育が行き届かないパキスタンにあるもう一つの「学び」の場だ。

データを活用した識字教育の普及

なぜ彼らは、学校教育を受けることができないのか。その背景には、貧しくて制服などが買えなかったり、徒歩圏内に学校がなかったり、農作業や弟と妹の世話をしなければならなかったりと、さまざまな理由が絡み合っている。結果、パキスタンの識字率は、南アジアでも最低レベルの54%。都市と地方、男女の格差も大きい。日本で育った私たちに「読み書きができない」という事実は想像し難いが、自分の名前を書けないどころか、公共料金の請求書も読めず、市場で買い物しても計算ができない。この国では多くの人がそんな生活を送っているのだ。

この状況を打開すべく、国内最大の人口を擁するパンジャブ州

は、2002年に「識字・ノンフォーマル基礎教育局（以下、識字局）」を設立。学校教育にアクセスできない5〜14歳を対象に「ノンフォーマル小学校」（40カ月）、幼少時に教育を受ける機会に恵まれない15〜35歳を対象に「成人識字学級」（6カ月）の普及を開始した。

しかし設立後間もない識字局には、どこにどれくらいの非識字者がいるのかなど、地域住民のニーズを正しく把握する情報がまったくなかった。そこでJICAは04年7月から3年にわたり「パンジャブ州識字行政改善プロジェクト（フェーズ1）」を実施。州内のモデル4県を対象に、人口、識字者・非識字者の数、地域分布、学校数・生徒数をまとめたデータベース「識字マネジメント情報システム（LitMIS）」を開発。このLitMISを活用することで、本場に必要とされている場所と人に、ノンフォーマル教育を提供することが可能になった。

その成果を受けて07年7月から、フェーズ2として協力の対象を州内の全35県に拡大。今度は連邦、州、県の教育関係者を巻き込み、既存のデータベースを、卒業・中退・再入学した生徒の数を加えた「ノンフォーマル教育マネジメント情報システム（NFEMIS）」に再構築。識字普及員が



パキスタン
from PAKISTAN

読み書きから 国の未来を創り出す

読み書きを勉強するレンガ工場の子どもたち。彼らもレンガ製造の重要な働き手だが、ノンフォーマル小学校で学ぶことで、工場外にある世界にも目を向けるようになった

南アジアの最貧国の一つであるパキスタンでは、読み書きができない人が国民の半数近くにも上る。貧困などが理由で公立・私立の学校へのアクセスも限られる中、今まさに、期待が高まっているのが「ノンフォーマル教育」だ。昨年12月、国内最大の人口を抱えるパンジャブ州の挑戦とJICAの支援を取材するために現地に足を運んだ。

学校外の「教室」で 学ぶ子どもたち

12月中旬、パキスタン第2の都市ラホールの空港に到着すると、鮮やかな布に身をまとった女性たちが目に飛び込んできた。気温は15度。師走の寒波に見舞われた日本から来ると、時折吹く風がほどよく心地いい。

ラホール周辺の冬は、迎り一面、厚い霧に覆われるのが特徴。この日も、どこまでも続くどんよりとした灰色の空。しかし真夏には40度を超す気温の中で暮らす人々は、真つ青な晴天ではなく霧がかかった空に「哀愁」を感じるという。「こんな美しい霧の日には、大切なあの人に会いたい」。彼らはそんな風に何かにつけて詩を詠む。しかしそれも「読み書き」ができないければ、文字として伝え残すことができない。……

「A! B! C! D!」

ラホールの市街地から車に揺



厚い霧に覆われたラホール市内。街中には近代的な建物も見られるが、郊外になると一転、農村地帯が広がっている

「まずは現場へ」が識字局の方針。プロジェクトの数少ない女性スタッフとして活躍するファティマ・バトゥールさん（左）もノンフォーマル小学校や成人識字学級を定期的に回り、教師や生徒、親たちにヒアリングした内容を識字局の取り組みに反映している



レンガ工場で働く労働者たちは、識字局とJICAが作成した「レンガ製造と安全マニュアル」を使いながら読み書きを学ぶ

気のあるにぎやかな場所だ。そんな街の喧騒から少し離れた、大きな白い煙突が所々に現れた。聞くと、日干しレンガを作っている町工場だという。ここで働くのは、社会から疎外された貧しい人々。数カ月おきに工場から工場へ、一家そろって渡り歩く生活で、国民に割り当てられるIDカードを持っていない人も多い。もちろん、学校に行つたことなどなく、読み書きをできる人はごくわずかだ。しかし、州の識字率を上げるためには、最貧困層の彼らを見逃すことはできない。そこで識字局は「レンガ工

場識字教育普及プロジェクト」と銘打ち、09年からムルタン県とハネワル県のレンガ工場で識字教育を推進。JICAと協働で工場内の学校の開設や教師の派遣、教材の配布などを支援している。この日もレンガ工場の一角で、子どもたちがウルドゥー語の勉強をしていた。靴も履いておらずとても寒そうだったが、「勉強できて楽しい」と口をそろえる姿は何とも頼もしい。「将来は医者者さんになって工場で働く人たちを助けたい」と目を輝かせるロージー・サレームちゃん(8歳)。彼女たちが「夢」を語れるように

日本を参考に 識字率100%を目指す
このようにパンジャブ州では、少しずつだが確実に、ノンフォーマル教育を通じた学びの機会が拡大している。次のステップは、ノンフォーマル教育の質の改善。ただ教え、学ぶだけでなく、読み書き能力を携えて考える力をはぐくみ、社会で活躍できてこそ意味があるからだ。そこでJICAが2011年7月から実施しているのが「ノンフォーマル教育推進プロジェクト」。識字局とともに、ノンフォーマル教育のカリキュラムの作成、評価手法とシステ

ムの確立、教員や職員の研修の仕組みづくりなどを進めている。識字局のバルベーズ・アーメッド・カーン次官は「いかなる状況にあっても、人々の教育の機会を奪われてはならない」と強調する。日本ではすべての国民が、教育に対する意識が非常に高いと聞いています。それこそパキスタンが目指す理想の姿。私たちに立ち止まっている時間はない。JICAのノウハウを借りながら改善を進めていく」と意気込みを語る。2020年までに識字率100%達成を目指すパンジャブ州。それは決して容易なことではないが、カーン次官は「情熱を持って取り組めば必ずできる」という。大橋専門家は「ノンフォーマル教育の質を上げて学習到達度と卒業資格を明確にした上で、学校教育や職業技術教育との連携を通じて、教育を受けた後に社会参加にまでつなげることが目標。とても大きな挑戦ですが、識字局職員の能力を引き出しながら良い方向に持っていきたい」と話す。教育は人生を変える。現地で出会った人々から何度も聞いた印象的な言葉だ。その言葉の裏に隠された教育に対する情熱に、読み書きからつながる国の未来を見たような気がした。



識字教育の重要性を語る識字局のカーン次官。日本の教育システムへの関心も高く、大橋専門家からその詳細を学びながらより良い教育の形を模索している



CLCの授業の様子をモニタリングする大橋専門家(右)。「今まで学ぶ機会がなかった人たちの学習意欲は大変高く、教育を受ければ将来の可能性も広がると思います」と話す



最近、新たな取り組みとして始まったのが整備士などを育成する職業訓練校での識字教育。専門用語なども学び、実践的な読み書き能力と就職のための技術習得を目指す

になった。自分が作った服をお母さんにプレゼントしたいので裁縫もがんばりたい」と、うれしそうに話してくれた。CLCは地域に根差した学びの場。幼児から成人まで、さまざまな層に教育を提供すべきというコンセプトをJICAが紹介したこと、識字局はより多角的なプログラムの導入に取り組んでいるところだ。「成人の場合、単に読み書きができるようになるだけでなく、それをいかに社会生活に生かしていくかが重要なのです」と大橋知穂JICA専門家

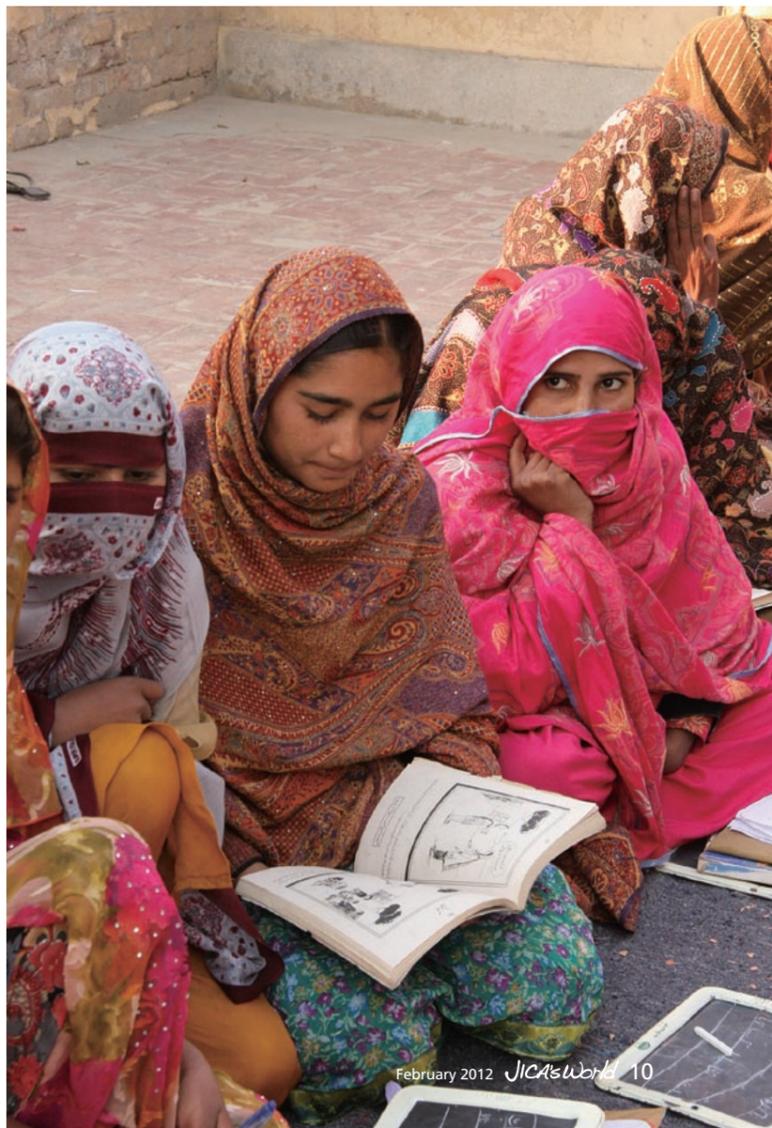
最貧困層にまで届く 教育支援
さらに車で走ること約2時間、南アジア最古の都市の一つといわれるムルタンに着くと、にぎやかな市場と美しいモスク、聖者廟が目飛び込んできた。とても活

裁縫教室では、識字局から提供されたミシンを使って自分でデザインを考えて洋服を作る。完成度が高いものは近所の人や市場などで売っているという



小さな教室から生まれる 大きな学び

「毎日みんなと一緒に勉強できるのが楽しくて」
ラホールから車で約2時間、オカラ県のコミュニティーラーニングセンター(CLC)で学ぶルキヤ・パシールさん(20歳)は3人姉妹の長女だ。「ここに通うことができるのは私一人だけ。妹たちは家の手伝いをしています。両親も学校に行つたことがありません。センターといっても野外の青空教室。週5日、識字に併せて裁縫や野菜づくりを学んでいる。「読み書きができるようになって、家で採れた野菜を市場で売ったり、妹たちに本を読んであげたり、電気料金を教えてあげたりと家族をたくさん助けられるよう



野外の「教室」で読み書きを学ぶ女性たち。すでに日常生活で「音」として言葉を駆使しているため学びのスピードも早い